み光りの　戦没者に捧ぐ

■楽曲データ

歌詞：大谷嬉子　作詞

楽曲：清水脩　作曲

発表：－

初演：「戦没者追悼音楽式典」　1953年４月18日

初出：－

管理番号：M1210

■創作の経緯

「戦没者追悼音楽式典」（1953年）にて初演。作詞者の大谷嬉子（第23代勝如上人裏方）は弟を沖縄戦で亡くしており、「私も遺族のひとりです」と述べて「戦没者に捧ぐ」と題する和歌を詠んだ。それを歌詞に作曲されたのが、本作品と《千万の》である。

■校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第３巻収録

底資料：『合唱曲集　響流　混声編』　カワイ楽譜音楽研究部　1972年

比較資料１：『合唱曲集　響流　男声編Ⅰ』　カワイ楽譜　1971年

比較資料２：『佛教讃歌』　本願寺出版協会　1973年

校訂の詳細：特記事項なし

■解説

1953（昭和28）年４月18日、「戦没者追悼音楽式典」において発表されました。

この音楽式典は、オルガンの序奏にはじまり、開扉、献灯・献香、合掌のまま三帰依、礼拝、念仏など、式典の流れが十分に検討されたものでした。また、当時の式次第からは、法語朗唱（『執持鈔（しゅうじしょう）』または願成就の文朗唱）の間には、合唱隊がハミングで《恩徳讃》を助奏するなど、当時の新しい音楽式典の有りようを示していることがわかります。なお、この法要のもようはＮＨＫ京都放送局が録音し、翌々日（20日）に放送されました。

◆作者について

作歌は、大谷嬉子前お裏方（当時・第23代勝如上人裏方、1918～2000）です。

作曲の清水脩（1911～1986）は真宗大谷派寺院に生まれ、伝統的な仏教音楽である声明や雅楽にも明るく、西洋音楽と東洋音楽に精通した作曲家であったといえます。

◆曲について

《千万の》《み光りの》は、同時に作曲・発表されたということもあり、互いに対照的な作品となっています。《千万の》がハ短調で作曲され、朗詠的で荘厳な感じを持っているのに対し、《み光りの》はト長調で、明るく伸びやかな曲として書かれています。

◆歌詞について

少し飛躍するかもしれませんが、《千万の》が、自身が救われがたい凡夫であると深信（じんしん）する「機の深信」を表したものとするなら、《み光りの》は、このような凡夫を阿弥陀如来の本願のはたらきが必ず救うと深信する「法の深信」を表していると、味わうことはできないでしょうか。

《み光りの》を歌うとき、筆者には『浄土和讃』の次の一首が響いてきます。

慈光はるかにかぶらしめ

ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ

大安慰を帰命せよ（註釈版聖典558ページ）

仏の慈悲からはなたれた光明は、十方世界にゆきわたり、この光明のいたりとどくところには、人みなみ法の喜びにみちあふれている。身も心もやすらかにしてくだされる阿弥陀如来に、いまこそ私は帰命しなければならない。（高木昭良『三帖和讃の意訳と解説』永田文昌堂、1995年）

◆歌い方について

①阿弥陀如来のみ光りのなかに生きる喜びを、深く味わって歌いましょう。

②「ファ♯」の高い音が出てきます。高い音を歌うことがどうしても無理な場合は、適宜移調してみてください。

③４分の２拍子ですが、なめらかに歌うことを心がけて。行進曲風にならないように。

④１小節目冒頭の８分休符に注意して。語頭の「み」を自然に歌い出せるよう練習してください。

⑤６小節目の「わ」の音を、上から取ること。

⑥10小節目からは、16小節目のフォルテ（強く）へと至る勢いを大切に。13小節目からのクレッシェンド（だんだん強く）が特に大切です。

⑦15小節目の２分音符は、響きを豊かに。

⑧19小節目からのフレーズは、やすらかな喜びをもって歌いましょう。

⑨短い曲ですから、演奏の際には２度繰り返してもよいでしょう。ただし、その場合は１回目と２回目の表現に変化をつけて。２回目の最後は、フォルテのまま終わってもよいと思います。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者　福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 20（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第 145 号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.